

霞が関埋蔵金

菅 正治 著

新潮新書
714円

本棚から一冊

らだろ。

ところが、巨大な特別会計にいくら余り金があるのか、国民には今でも極めて情報不足だ。そもそも「埋蔵金」



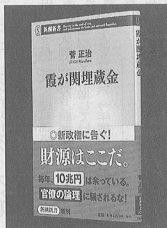
評者 早稲田大学大学院教授

川本 裕子

をすすめているのに離れではき焼き」といって、国の財政状況が年々厳しさを増し、増税が不可避という意見もある中で、国民が見もみれば自増の議を高め、今ある無駄を削減し、今ある無駄を全て明らかにした上でなければ自増の議論にはつきあえない、というのが正直なところは、膨大な国の予算書

日本の国の予算はどれほど無駄があるのか。数年、日本国民はずっと問い続けてきたように思う。道路をはじめとする公共事業、行政改革の議論や政治家の腐敗にも大きな税の無駄遣いがあるのではという疑問が根深くある。昨年の政権交代も、こうした問いへの答をめぐる一つの画期的な出来事だったのかもしれない。

予算の不透明性・非効率性の中でも最大の問題がいわゆる特別会計の「埋蔵金」だ。国の予算でよく話題になり国会審議でも最も関心の集まるのは一般会計だが、歳出ベースで特別会計はその4・5倍にもなる。塩川元財務大臣は「母屋でお財



客観的なデータで財政構造に迫る

を讀み通すことのできない国民にはどうもわかりづらい。

こうした疑問に答える好著が本書である。特別会計や埋蔵金問題の経緯に加え、果たしてどのくらいが余っているのかという喫緊の問題に対し、客観的なデータを明快地問題の所在をえり出していきる。本を見て森を見失い勝ちな解説が多い中で、要点をまとめわかりやすく、財政を担当した気鋭ジャーナリストの論鋒が冴えている。昨年末の予算案編成では、くらんだ歳出の埋め合わせ財源探しに終始し、各特別会計の適切なストック水準は何か、一定割合は必ず借金返済に充てるなどの剰余金活用のルールの内り方など、本質に迫る議論は一向に深まらなかった。埋蔵金の議論がいかにまだ解決から遠いかを思い知る読後感でもある。